埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第95集

四十塚古墳群

― 第4次調査 ―

2008.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第95集

四十塚古墳群

― 第4次調査 ―

2008.3

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、平成18年1月に深谷市・岡部町・川本町・花園町との合併により新たなスタートを迎えることとなりました。合併後の深谷市は、北部に利根川、南部に荒川が流れ、変化に富んだ地形や豊富な農産物があり自然の恵み豊かな土地柄を有しています。

ここには、先人たちの残した足跡が、埋蔵文化財として今なお多く眠っております。なかでも、縄文時代晩期から弥生時代初期の土器を出土した四十坂遺跡・上敷免遺跡や、古代榛澤郡・幡羅郡の役所と推定される中宿・幡羅遺跡などは、埼玉県の原始・古代を考える上で欠かすことのできない遺跡と言えるでしょう。

深谷市では、こうした貴重な遺跡群を保護するため鋭意努力し、破壊を免れない場合は、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成12年度に民間会社の受託事業として実施した調査の成果をまとめたものです。発掘調査では、古墳跡1基が検出され、円筒埴輪等が出土しています。出土品は少量ですが、地域史を解明する上では、重要な成果を得られたものと確信しています。

本書が学術・教育関係はもとより、文化財に対する保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成20年3月

深谷市教育委員会
教育長　猪野幸男

例　言

1．本書は、平成12年度に実施された四十塚古墳群の発掘調査報告書である。なお、発掘調査箇所の地番は、深谷市岡字二の丸1607番地1である。

2．発掘調査は、鉄塔建設を原因とする。発掘調査担当者は鳥羽政之である。文化財保護法第57条の2（現行第93条）に基づく土木工事等のための発掘に関する届出は、平成12年9月28日付教文第295号にて、同法第57条の1（現行第92条）に基づく調査のための発掘に関する届出は、平成12年9月28日付教文第296号にて岡部町教育委員会から埼玉県教育委員会へ進達した。

3．発掘調査は、平成12年10月2日から平成12年10月20日にかけて実施した。

4．本書の執筆・編集は鳥羽政之が行い、出土品の実測図・観察表は、竹野谷俊夫が作成した。

5．本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

6．本書の刊行に関わる組織は、以下のとおりである。

（事務局）

深谷市教育委員会教育長	猪野　幸男	主　査	高村　敏則
教育次長	石田　文雄	主　任	知久　裕昭
次　長	中村　信雄	主事補	幾島　審
生涯学習課長	澤出　晃越	臨時職員	栗原貴世実
主　幹	武井　茂	（整理作業）	
文化財保護係長	古池　晋禄	臨時職員	竹野谷俊夫
主　査	森下昌市郎	〃	黒澤　恵
〃	鳥羽　政之	〃	佐藤　由江
		〃	布施みゆき
		〃	伊藤万里子

凡　例

1．発掘調査地点位置図は岡部町都市計画図（1/2,500）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』及び『深谷』（1/25,000）を使用した。

2．遺構実測図は、現場では基本的に1/20で作成し、本書掲載の段階で1/60とした。遺物については、基本的に1/3で掲載し、石器については原寸とした。

3．図中の方位は、座標北を示す。

4．遺物観察表の数値に（　）のあるものは推定値、《　》のあるものは残存値を示す。

5．土層断面図及びエレベーション図のスクリーントーン（斜線）は、地山を示す。また、図中の数値は、標高値を示す。

目　次

序

例言・凡例

目次

Ⅰ　発掘調査の経緯及び経過 …… 1
　1．発掘調査の経緯 …… 1
　2．発掘調査・整理報告の経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 3

Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 6
　1．四十塚古墳群の概要 …… 6
　2．発見された遺構と遺物 …… 6

Ⅳ　まとめ …… 12
　1．四十塚古墳群出土の土器・埴輪について …… 12
　2．四十塚古墳群展開の画期について …… 12

挿図目次

第1図　四十塚古墳群の調査地点 …… 2
第2図　四十塚古墳群の範囲と調査地点 …… 2
第3図　周辺の遺跡分布 …… 4
第4図　グリッド配置図 …… 6
第5図　1号墳平面図及び断面図 …… 7
第6図　1号墳出土埴輪 (1) …… 8
第7図　1号墳出土埴輪 (2) …… 9
第8図　1号墳出土埴輪 (3) …… 10
第9図　周溝内出土尖頭器 …… 10
第10図　四十坂遺跡全測図 …… 14
第11図　四十坂遺跡1号墓出土土器 …… 14
第12図　四十坂遺跡3号墓出土土器 …… 14
第13図　四十塚古墳出土遺物 …… 15
第14図　白山古墳群全測図 …… 15
第15図　白山17号墳出土遺物 …… 15
第16図　四十坂遺跡2号墳出土遺物 …… 16
第17図　四十坂遺跡4号墳出土遺物 …… 16
第18図　寅稲荷塚古墳全測図 …… 16
第19図　お手長山古墳全測図 …… 16

写真図版

【図版1】
発掘調査前の状況
遺構確認の状況
1号墳完掘状況（北方より）
周溝立ち上がりの状況
1号墳完掘状況（東方より）
土器出土状態
土層堆積状況
【図版2】
1号墳No.1
1号墳No.3
1号墳No.4
1号墳No.5
1号墳No.6
1号墳No.7
1号墳No.8
1号墳No.9～14
【図版3】
1号墳No.15
1号墳No.16～21
1号墳No.22～27
1号墳No.28～32
周溝内出土尖頭器

Ⅰ　発掘調査の経緯及び経過

1．発掘調査の経緯

四十塚古墳群は、埼玉県遺跡登録番号№63-100にあたる。古墳群は、ＪＲ岡部駅の北西１ｋｍにあり国道17号線沿線に所在する。遺跡の範囲は東西約380ｍ、南北約300ｍとなる。古墳群内には、四十坂遺跡、四十坂南遺跡、四十塚古墳群、二の丸遺跡等が存在しているが、古墳が分布する範囲を第２図点線のように想定している（註１）。四十塚古墳群内において墳丘が現存する古墳として、寅稲荷塚古墳、四十坂浅間山古墳が存在する。寅稲荷塚古墳は、全長51ｍの前方後円墳であり、当古墳群最大規模を有す。周溝の調査等より６世紀後半代の築造が考えられる。浅間山古墳は、寅稲荷塚古墳の西方450ｍに位置する。径30ｍ程の円墳と考えられるが、周溝等の調査は未実施である。また、現在は削平され墳丘は存在しないが、四十塚古墳からは横矧板鋲留短甲、五鈴付鏡板等が出土し、現在に伝えられている。

今回報告する発掘調査地点は、寅稲荷塚古墳の西北200ｍにあたる。発掘調査は、電話会社鉄塔建設に伴う緊急発掘である。

平成12年９月７日、株式会社ツーカーセルラー東京（以下、事業者と記す）は、深谷市（旧岡部町）岡字二の丸1607番地１において鉄塔建設を計画し、岡部町教育委員会に埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会した。教育委員会では、開発予定地は四十塚古墳群（県遺跡登録番号63-100）の範囲内にあたること、埋蔵文化財の詳細を確認するため試掘調査を実施する必要があることを平成12年９月８日付教文第282号で回答した。

事業者からは、ただちに埋蔵文化財試掘依頼書が提出され、平成12年９月13日に岡部町教育委員会による試掘調査が実施された。試掘調査の結果、古墳跡１基の周溝が検出され、この結果を事業者に報告した。

その後、事業者、教育委員会との協議により開発予定地の変更、工事内容の変更等は、難しい状況であることが確認され、発掘調査を実施する方向で調整が進められた。また、発掘調査の実施については事業者が岡部町遺跡調査会に委託した。

事業者による埋蔵文化財発掘の届出は、平成12年９月26日付で、岡部町遺跡調査会による埋蔵文化財発掘調査の届出は、平成12年９月28日付岡遺調第78号で提出され、それぞれ岡部町教育委員会を経て埼玉県教育委員会へ提出された。

2．発掘調査・整理報告の経過

(1)　発掘調査の地番

調査地点の地番は、岡部町（当時、以下深谷市と記す）岡字二の丸1607番地１である。発掘調査面積は、42㎡である。

(2)　表土除去

発掘調査は、10月２日から着手した。作業は、まずバックホー0.4による表土除去から始めた。調査地は、台地末端部に位置している。表土は、30cm程堆積しており、この表土を除去すると遺構確認面である黄褐色ローム層上面となる。

(3)　遺構確認

表土除去は１日で終了し、遺構確認作業を実施した。先の試掘調査で把握したとおり、比較的容易に周溝の一部が検出された。

(4)　遺構掘り下げ及び図化作業

確認作業の後、遺構掘り下げを開始した。掘り下げについては、７日を要した。遺物については、埴輪片を中心に出土した。小片については一括して取り上げた。

その他については出土状態の写真撮影終了後、出土位置、出土レベルの記録を行い取り上げた。

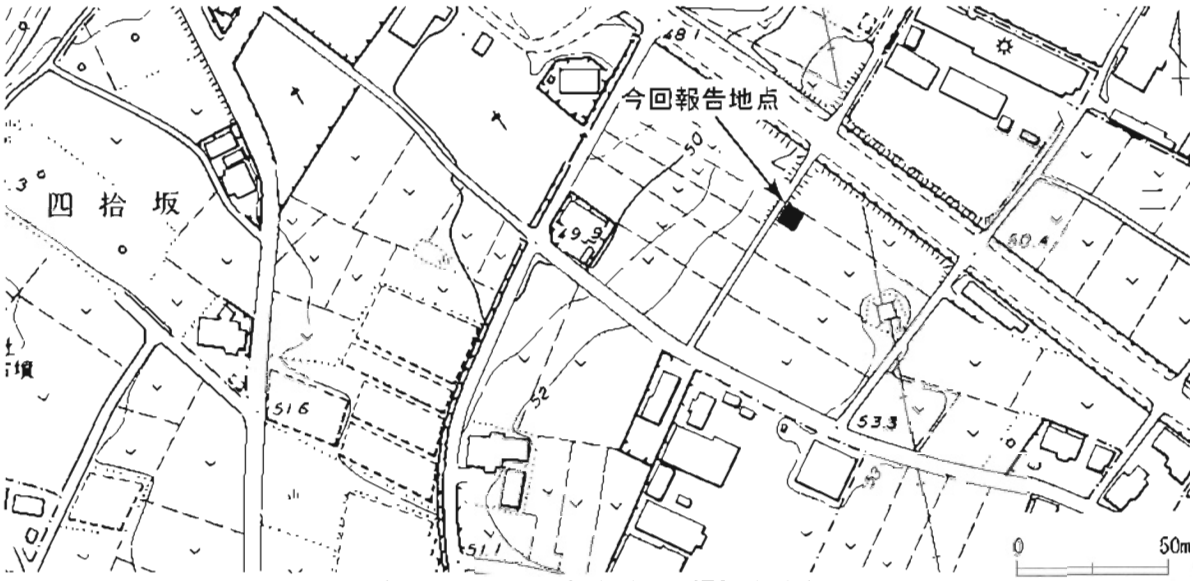
その後、遺構完掘状況の写真、図化を行い、平成12年10月20日をもって発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

(5)　整理作業

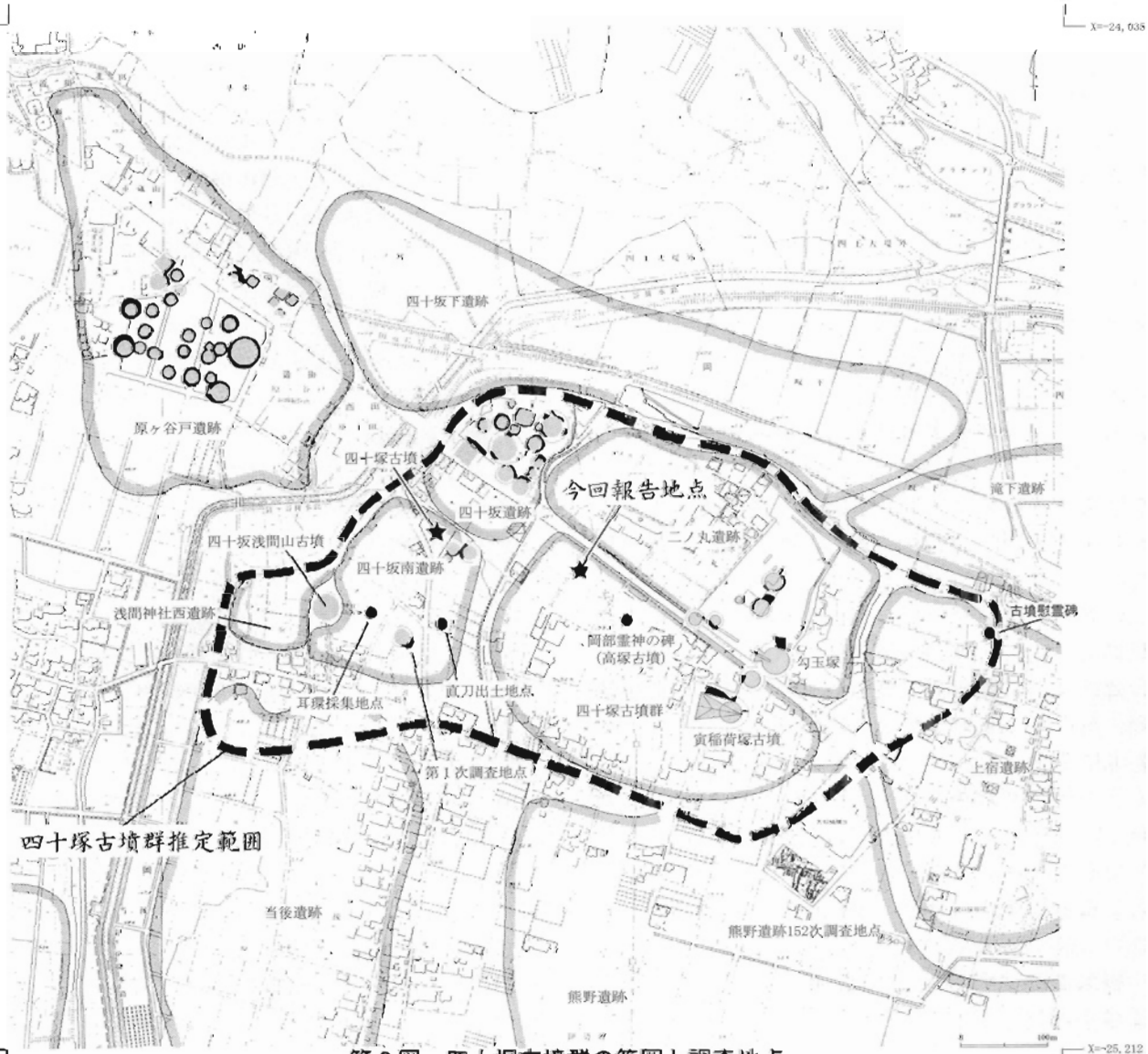
整理作業は、水洗・注記を平成12年度中に終了した後、しばらく中断していた。その後の事業については深谷市教育委員会が引き継いだ。平成19年１月～６月にかけて遺物の復元、図面整理、遺物実測、観察表作成等の作業を行った。平成19年７月～12月にかけて遺構・遺物のトレース、図版作成、原稿執筆、レイアウト等を行った。

その後、平成20年１月から印刷・製本作業にとりかかり、報告書は、平成20年３月に刊行された。

（註１）詳細については、岡部町教委2005『四十塚古墳の研究』を参照されたい。



第１図　四十塚古墳群の発掘調査地点



第２図　四十塚古墳群の範囲と調査地点

II　遺跡の地理・歴史的環境

1．地理的環境

荒川以北の深谷市域は、地形的には櫛挽台地、本庄台地、妻沼低地に大きく区分される。

櫛挽台地は、荒川左岸に広がる台地であり、荒川により形成された扇状地形を有する。西部は、藤治川・針ヶ谷堀周辺で本庄台地、山崎山丘陵と区分され、北端部は、福川左岸付近で妻沼低地と接する。妻沼低地と櫛挽台地の境界付近を東流する福川は、櫛挽台地扇端部の豊富な湧水を集めながら、深谷市北部域の農業用水として現在も重要な位置を占めている。

櫛挽台地の標高は、扇頂部にあたる寄居付近で100 m程、扇端部は35～50 m程である。また、当台地は、荒川の流路変更による段丘が発達し、その過程により櫛挽面、寄居面に大別される。

櫛挽面は武蔵野面に対比され、深谷市東半をのせる。台地上には、藤治川、針ヶ谷堀川、西川、上唐沢川、押切川、下唐沢川等の中小河川が北流する。これらの河川は、扇央部から扇端部付近の湧水に端を発し、台地を北流する。一見平坦に見える台地上も、現存する中小河川や、その他の埋没谷による緩やかな起伏がある。

寄居面は、櫛挽面以降の段丘面である。櫛挽面とは、寄居高校付近から深谷市下郷、境、折之口、上宿へと連なる崖線で区分される。

この寄居面では、ローム層が比較的厚く堆積する段丘面と、その下位にありローム層の堆積が薄いか認められない段丘面に区分される。前者は、御威稜ヶ原面として別称される。境界の崖線付近では湧水が随所に認められる。さらに、寄居面以降、川本明戸付近を扇頂とする荒川新扇状地が形成される。御威稜ヶ原面との境界付近及び扇端部付近は、熊谷市域の重要遺跡が集中する。

本庄台地に相当する地域は、深谷市西端の藤治川・針ヶ谷掘以西の地域（旧岡部町榛沢地区）である。台地上には、見馴川（小山川）・志戸川、女堀等の中小河川が北流しており、この河川の流域は、沖積低地となる。

妻沼低地は、利根川流域の広大な低地帯である。南方で本庄台地及び櫛挽台地と接する。旧岡部町北部、旧深谷市北部が該当し、低地内では、中州的に微高地が存在し、この微高地上に遺跡が集中する。

この他、櫛挽台地と本庄台地の境界付近に山崎山（標高約117m）・諏訪山丘陵（標高約109m）、櫛挽面に仙元山丘陵（標高約98m）と呼称される残丘上の小丘陵が存在する。

一方、荒川以南は、旧川本町域南部が該当する。当地域の南半は、江南台地上にのる。江南台地も荒川右岸の流路変更により形成された段丘面であり、扇状地形を有する。

扇頂部付近の寄居町木持では標高140 m、扇端部の熊谷市原新田付近では標高45 mを測る。この段丘面は江南面と呼称され、櫛挽面以前のものである。江南面の下段には寄居面が存在する。この段丘面は、櫛挽台地側のそれと対応する。

江南台地上から下段の段丘面（寄居面）にかけて、荒川の支流である吉野川が東流及び北流し、その流域には狭小であるが沖積低地が存在する。

(引用・参考文献)
籠瀬良明　1975「自然堤防」古今書院
川本町　1991「川本町史－通史編」
埼玉県　1978「埼玉県市町村誌第14巻－岡部町」
埼玉県　1986「埼玉県史別編３－自然」
深谷市　1969「深谷市史」
〃　1980「深谷市史－追補編」
寄居町　1986「寄居町史－通史編」

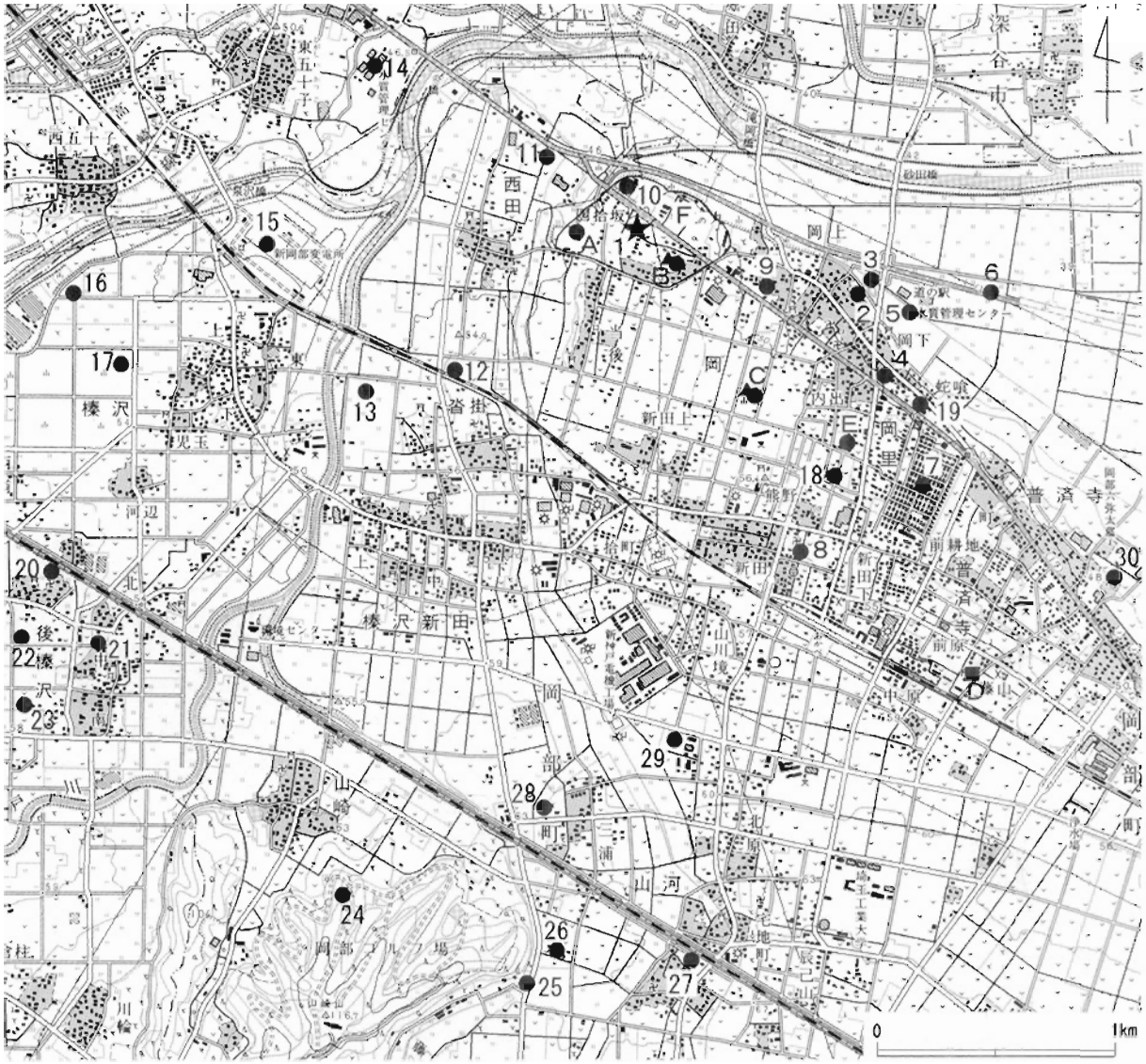
2．歴史的環境

本項では、四十塚古墳群と密接に関与すると推定される櫛挽台地北縁部から妻沼低地にかけての地域（福川上流域）の遺跡群の動向を概観する。

弥生時代では、四十坂遺跡、樋詰遺跡、森下遺跡、上敷免森下遺跡などで調査が行われている。

特に、四十坂遺跡、上敷免遺跡は、弥生時代前期末～中期にかけての土器群が検出された遺跡として著名である。この点は、当地域が弥生文化波及の先進的役割を果たしたことを示す。

古墳時代前期の遺跡は、矢島南遺跡、起会遺跡、戸森松原遺跡、深谷町遺跡がある。これらの遺跡は、比較的小規模で、地域内において分散的である。また、該期の墳墓では、四十坂遺跡、上敷免遺跡で周溝墓が検出された。四十坂遺跡は、四十塚古墳群中にあり、古墳群の成立を考えるにあたり重要な遺構である。



1．今回報告地点　（古墳跡）
2．中宿遺跡　（郡衙正倉・律令期集落）
3．滝下遺跡　（河川跡・律令期集落）
4．岡廃寺　（寺院跡・古墳～律令期集落）
5．岡部条里遺跡　（古墳集落・条里水田・律令期居宅）
6．砂田前・樋詰遺跡（古墳～平安集落）
7．白山遺跡　（古墳群・律令期集落・中世居館）
8．新田遺跡　（律令期集落）
9．上宿遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
10．四十坂遺跡　（縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群）
11．原ヶ谷戸遺跡　（縄文・古墳集落・古墳群）
12．水窪遺跡　（縄文・古墳集落・古墳群）
13．新井遺跡　（律令期集落）
14．東五十子遺跡　（古墳・中世集落）
15．六反田遺跡　（古墳・中世集落）
16．大寄遺跡　（縄文・弥生～律令期集落）
17．西浦北遺跡　（縄文・古墳～律令期集落）
18．熊野遺跡　（官衙・律令期集落・中世居館）
19．塚東遺跡　（古墳～平安集落）
20．東光寺裏遺跡　（縄文・平安集落）
21．榛沢六郎成清館跡（中世）
22．石蒔遺跡　（古墳～平安集落・周溝墓）
23．地神祇遺跡　（古墳～平安集落）
24．千光寺遺跡　（古墳群・平安集落）
25．西谷遺跡　（縄文）
26．茶臼山遺跡　（古墳群）
27．伝上杉館跡　（中世）
28．山河聖天社　（中世）
29．西薗ヶ谷遺跡　（律令期集落・中世居館）
30．伝岡部六弥太館跡（中世）
A．四十坂浅間山古墳（円墳）
B．寅稲荷塚古墳　（前方後円墳）
C．お手長山古墳　（帆立貝式古墳）
D．前原愛宕山古墳　（方墳）
E．内出八幡塚古墳　（円墳）
F．四十塚古墳群　（古墳群）

第３図　周辺の遺跡分布

古墳時代中期では、遺跡は増加傾向にある。集落跡では、上敷免遺跡、森下遺跡、戸森前遺跡、起会遺跡、矢島南遺跡、岡部条里遺跡、砂田前遺跡等で、竪穴住居跡が検出されているが、いずれも小規模な集落跡と推定される。

墳墓では、戸森松原遺跡で、方墳～円墳にいたる古墳群が検出されている。中宿遺跡、四十坂遺跡でも該期の墳墓が検出された。

古墳時代後期初頭には、集落の規模が拡大する現象を見て取ることができる。上敷免遺跡、森下遺跡、戸森前遺跡、起会遺跡、矢島南遺跡、樋詰遺跡、岡部条里遺跡、砂田前遺跡、中宿遺跡、上宿遺跡で竪穴住居跡が検出された。砂田前遺跡、上敷免遺跡は、大規模な集落跡である。

当地域の古墳群には櫛挽台地上の四十塚古墳群、白山古墳群が代表的である。四十塚古墳群は、前期～中期の墳墓群を経て後期古墳群へと展開する。古墳群中の四十塚古墳は、横矧板鋲留短甲、五鈴付鏡板、鉄斧等が昭和初期に出土した。古墳築造時期は、５世紀末頃の年代が想定される。当古墳群展開の重要な画期を示す古墳である。

白山古墳群の開始年代については、榛名山二ツ岳の火山灰降下前に開始されていることは明確である。帆立貝式古墳である17号墳は、古墳群の中では唯一帆立貝の墳形を有す古墳であり、古墳群開始期のものと想定される。当古墳群の成立期には、近接する砂田前遺跡で集落が拡大する現象と重なることを勘案すると、両者は古墳群と対応する集落の関係にあるものと想定する。

さらに６世紀後半頃には、四十塚古墳群内に榛澤郡域最大級の寅稲荷塚古墳（前方後円墳・51ｍ）が築造されることから、当地域の優位性が確認できる。その後、四十塚古墳群から、やや距離を置き、お手長山古墳（帆立貝式古墳・49.5ｍ）、内出八幡塚古墳（円墳33ｍ）、愛宕山古墳（方墳・37ｍ）と有力な古墳が築造される。この点は、榛澤評家成立の前提となるものであろう。

妻沼低地側の古墳群では戸森古墳群、上敷免古墳群が存在するが、内容については明確ではない。

７世紀後半段階では、櫛挽台地北縁に榛澤評家が成立する。その原動力となったのは、古墳時代後期に有力墳墓を築造した在地首長層である。成立時期は、７世紀第３四半期頃であり、熊野遺跡内で検出された遺構群等が、評家を構成する施設群となる。熊野遺跡では、大型建物群、連房式鍛冶工房、石組井戸等の大規模な遺構群が７世紀第３四半期～第４四半期にかけて成立・展開する。この時期には畿内の土師器坏Ｃを模倣して成立したと想定される在地産暗文土器や、末野産須恵器による豊富な食器組成が目を引く。

さらに、白山、上宿、新田等の諸集落が新規に出現するか、規模を拡大する点も興味深い。

中宿遺跡では、７世紀末～８世紀初頭以降倉庫群が出現し、榛澤郡正倉に推定されている。郡庁院については、中宿遺跡南方の地点が有力であるが、現状では調査できない状況である。また、台地直下の滝下遺跡では大溝（滝下河川跡）の掘削が開始される。

８世紀前半では、中宿遺跡の東方に岡廃寺が建立される。岡廃寺は、９世紀第１四半期まで存続するが、その後は、寺域に竪穴住居跡が進出する。

８世紀中頃から後半にかけて低地部に条里型地割がみられるか、集落遺跡も点在する。低地部の集落遺跡として砂田前、矢島南、岡部条里、樋詰、起会、戸森前、森下、上敷免遺跡などがあげられる。

中宿遺跡正倉群周辺には10世紀後半～11世紀代にかけて竪穴住居跡が進出することから、この頃には正倉の機能は完全に失われていたものと思われる。

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1．四十塚古墳群の概要

四十塚古墳群は、櫛挽台地北端部に展開する古墳群である。遺跡の標高は51～53ｍ程である。

遺跡の北方は、台地の崖線となっており、眼下には広大な沖積地（妻沼低地）を見渡すことができる。遺跡の範囲は楕円の形状を呈し、東西約380ｍ、南北約300ｍを測る。

周辺には、二の丸遺跡（埼玉県遺跡登録番号63-010）四十坂遺跡（No.63-011）、四十坂南遺跡（No.63-013）、当後遺跡（No.63-016）等が存在しており、古墳跡の存在が確認されていることから、本来的には、これら遺跡群を含めた古墳群の範囲が想定される（第２図参照）。

四十塚古墳群は、昭和56年、昭和61年度に町道建設に伴う調査、平成６年度に個人住宅建設に伴う調査が実施されており（鳥羽他2001）、本報告は、第４次調査にあたる。

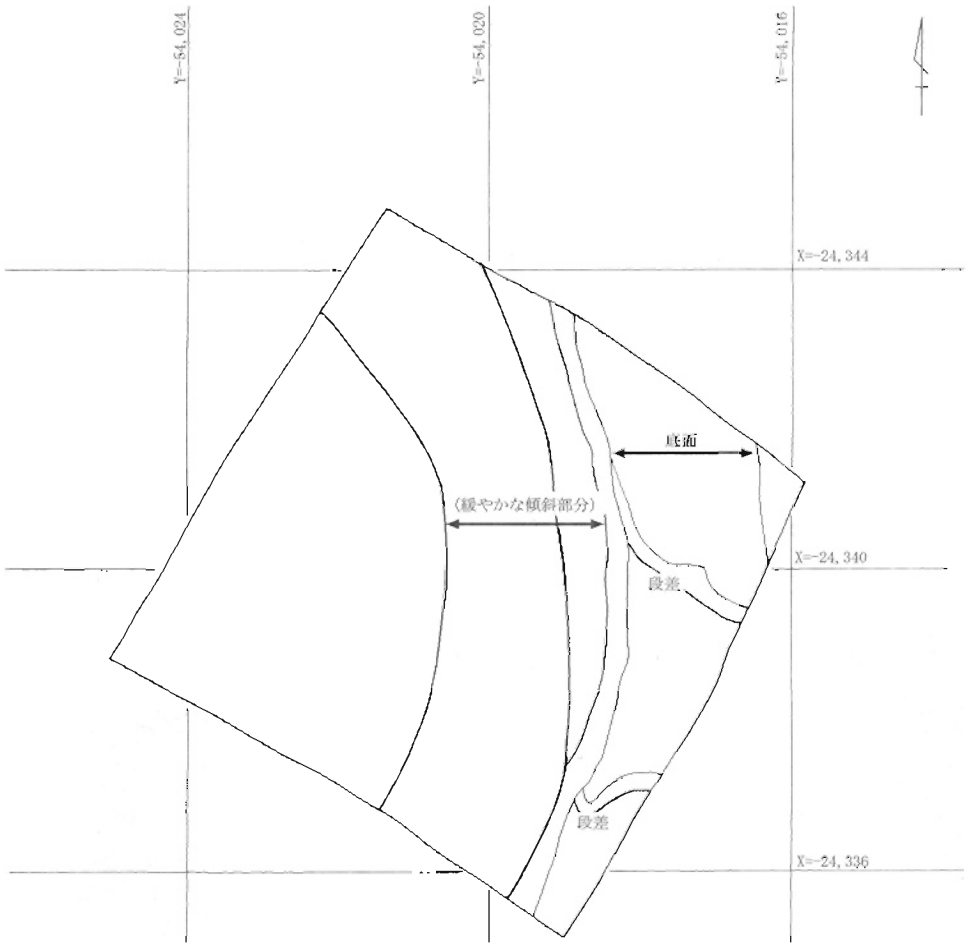
2．発見された遺構と遺物

今回報告する発掘調査地点は、深谷市岡1607番地１である。発掘調査面積は、42㎡である。発見された遺構は、古墳跡１基である。

（１号墳）

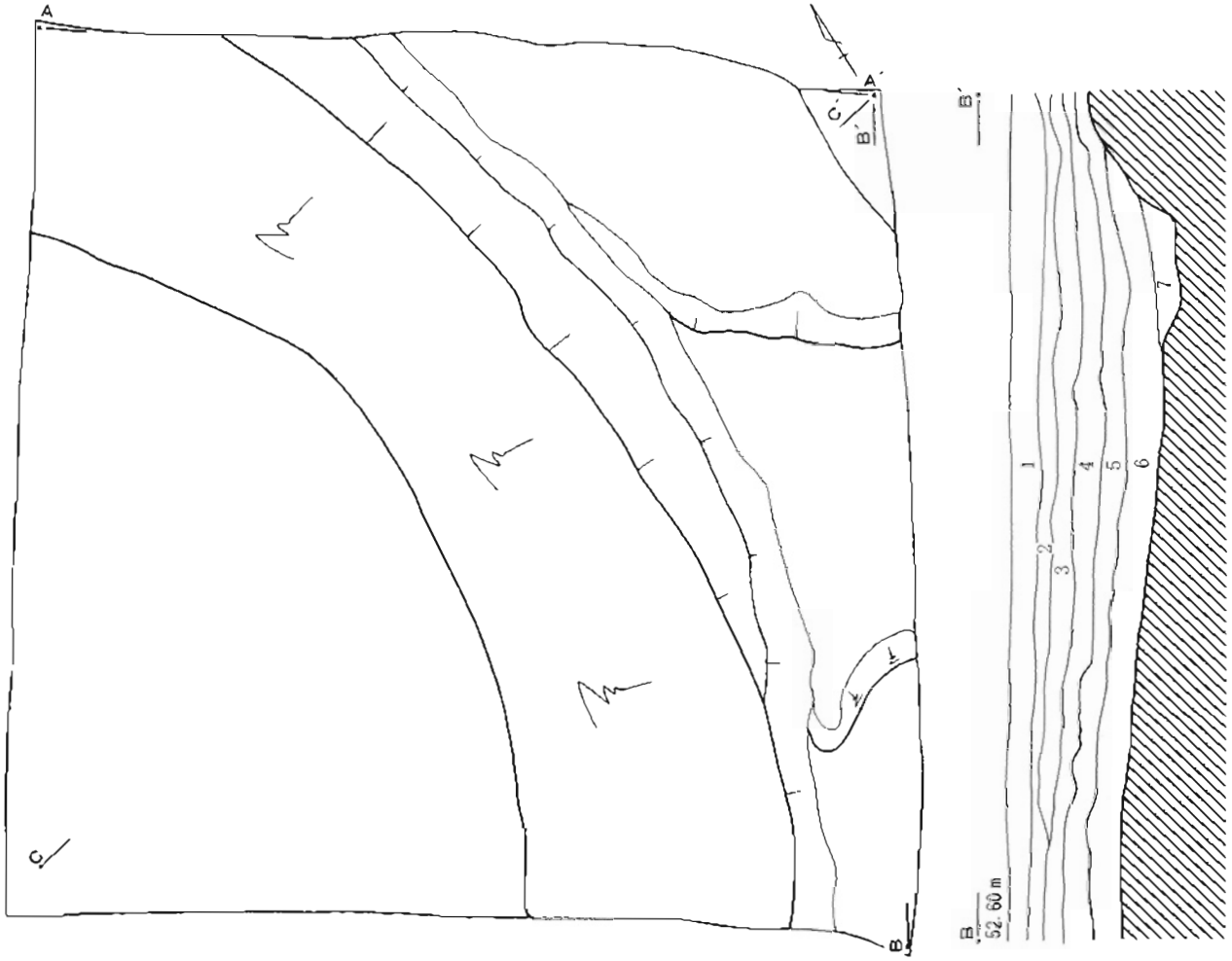
直径約16ｍの円墳に推定される。確認された範囲は、全周の15％程度である。周溝の幅は、外周部分が明確ではないが約3.0ｍと考えられる。古墳中央部から内周にかけて緩やかに傾斜する部分が、幅1.4～1.8ｍにわたり検出され、その後、急激に落ち込み底面となる。底面は、確認面からの深さ70㎝～1.1m、幅約1.8mであり南から北側へ傾斜し、段差を有す箇所がある。

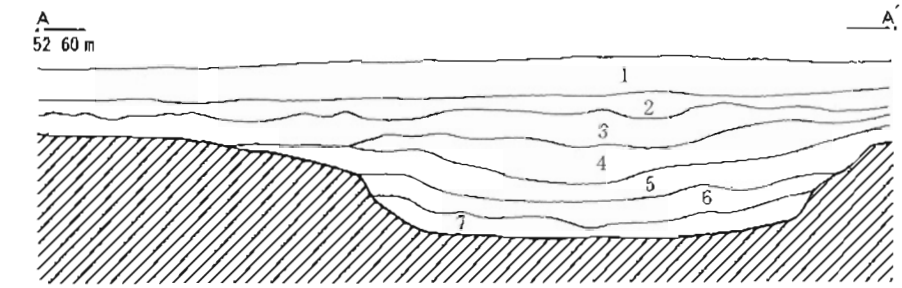
遺物は、土師器坏及び埴輪が周溝覆土中より検出されている。この他、旧石器時代の尖頭器が出土した。

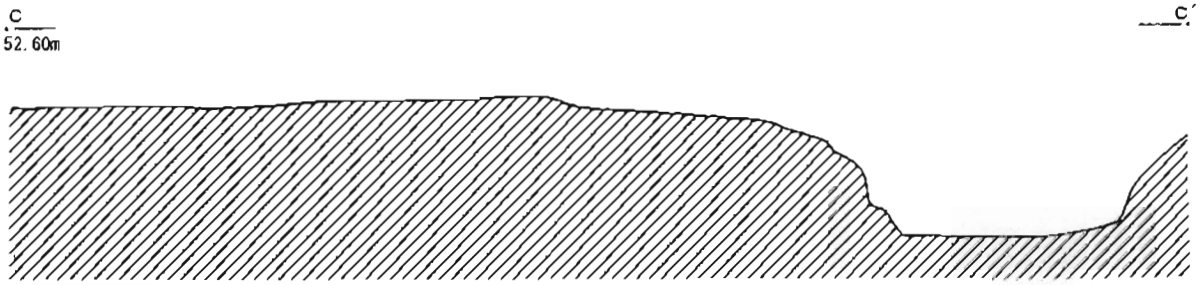


第４図　グリッド配置図

0　4m



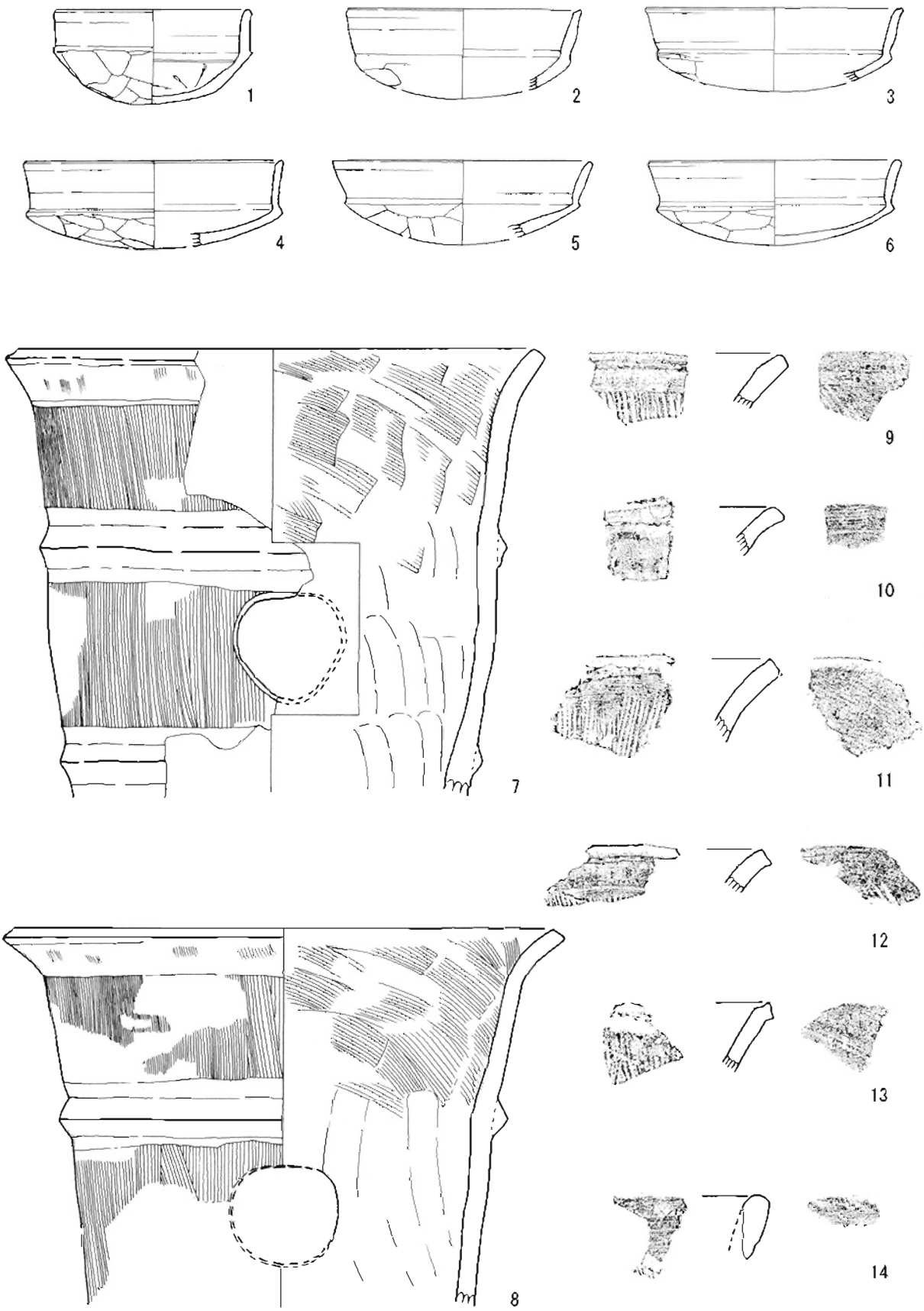




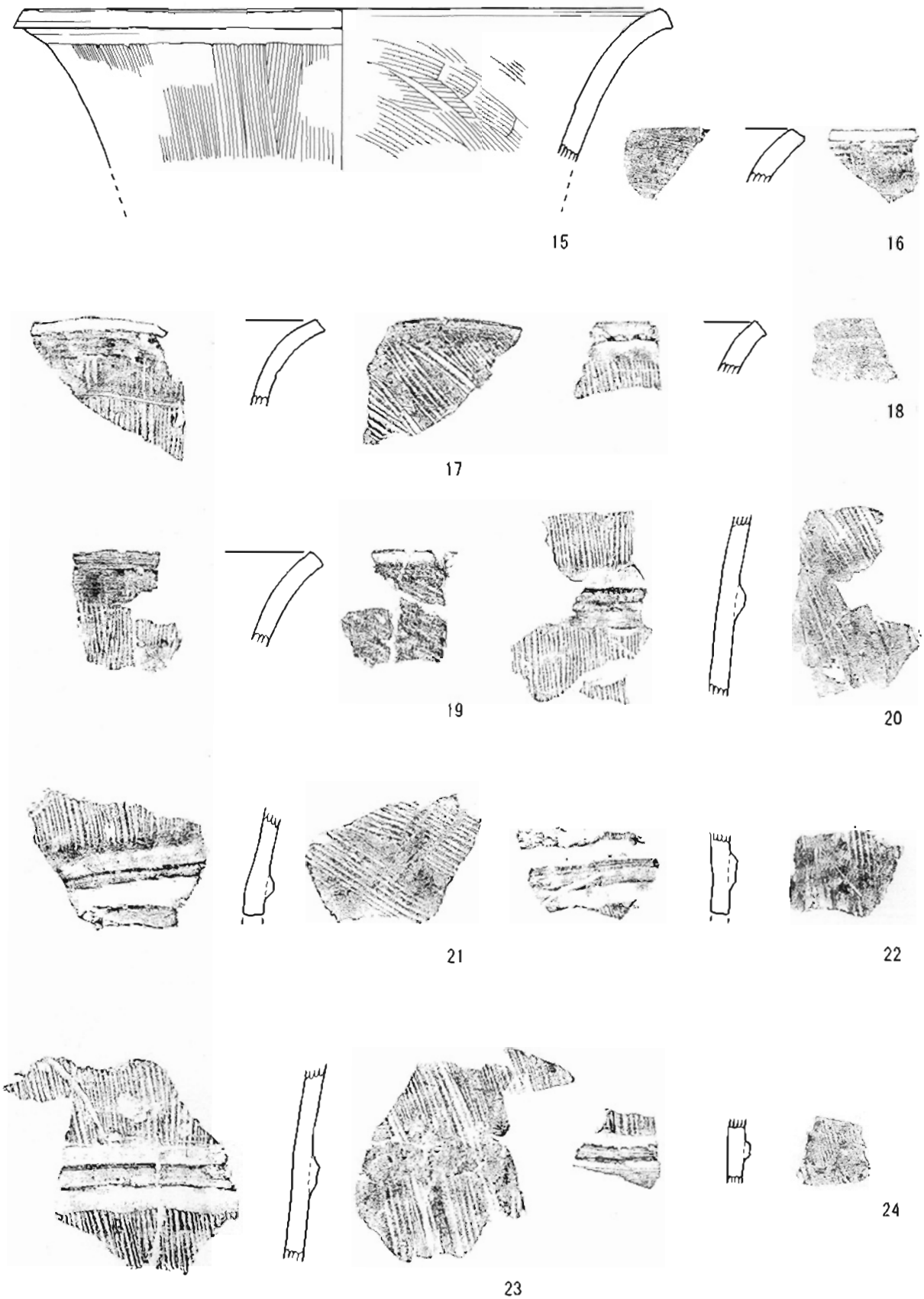
1	暗茶褐色土	浅間A軽石多量含む（耕作土）。
2	茶褐色土	ローム粒、浅間A軽石多量含む。やや粘性あり。
3	暗褐色土	ローム粒多量、浅間A軽石少量含む。ロームブロック少量含む。
4	黒褐色土	ローム粒多量に含む。茶褐色土斑状に混入する。
5	黄褐色土	ローム粒多量、ロームブロック少量含む。粘性あり。
6	黒褐色土	ローム粒少量、ロームブロック少量含む。やや粘性あり。
7	暗黄褐色土	ローム粒、ロームブロック多量に含む。茶褐色土斑状に混入する。

第５図　１号墳平面図及び断面図

0　2m

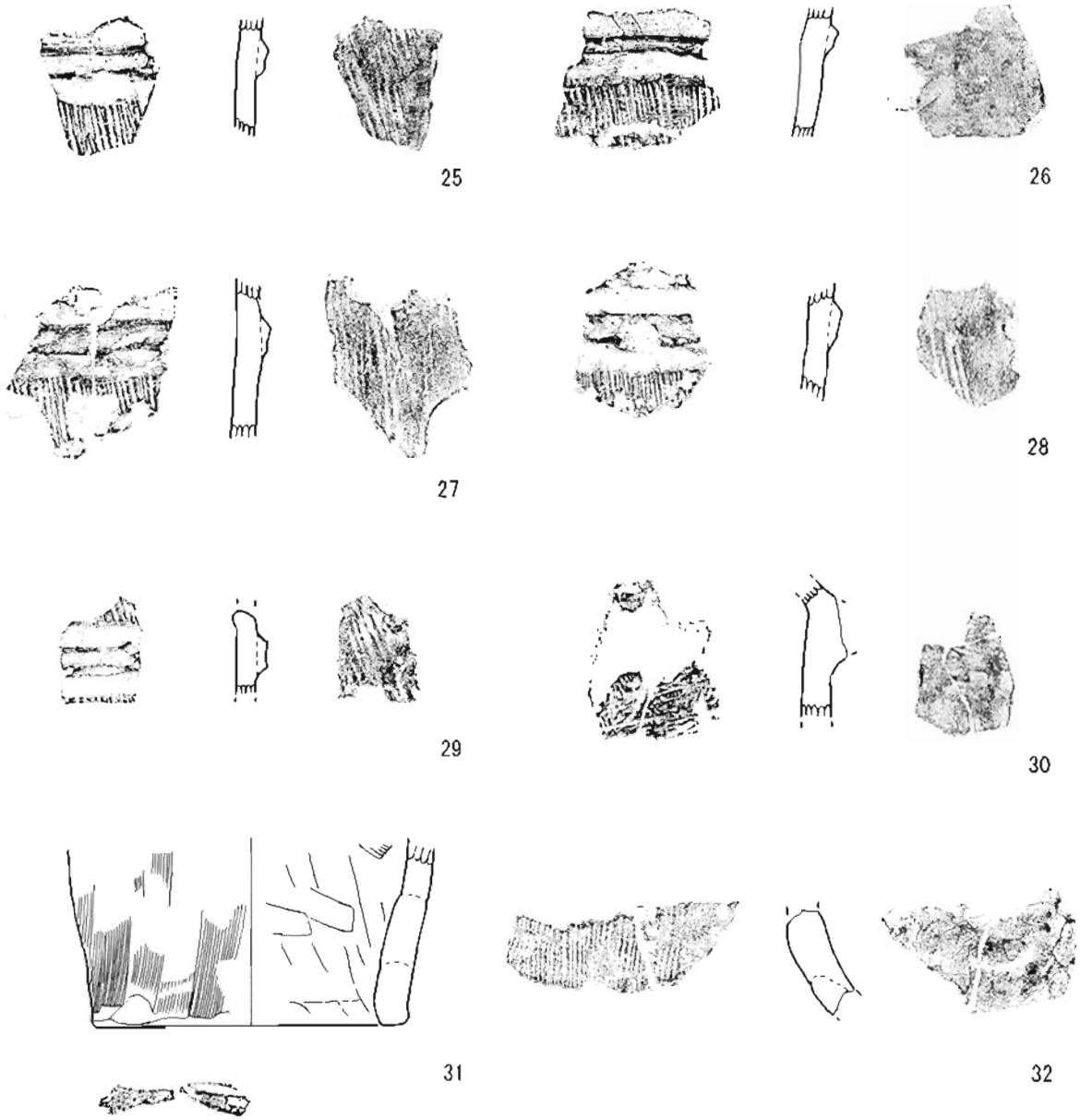


第６図　１号墳出土埴輪（１）



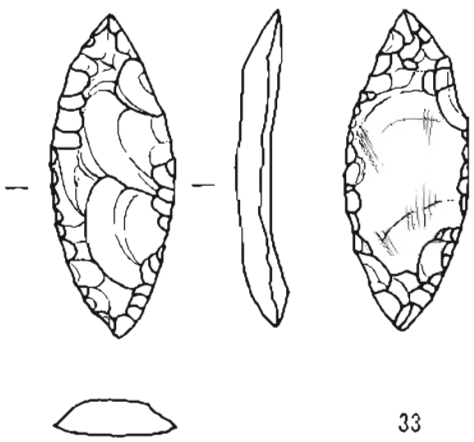
第７図　１号墳出土埴輪（２）

0　10cm



第８図　１号墳出土埴輪（３）

0　10cm



第９図　周溝内出土尖頭器

0　2cm

番号	器　種	口　径(cm)	底　径(cm)	器　高(cm)	色　調	焼　成	胎土	残存率	備　　考
1	坏	9.8	-	5.0	褐色	普通	石英、チャート、角閃石、パミス、砂粒	95%	
2	〃	(11.8)	-	(4.7)	淡赤褐色	〃	石英、微砂粒	15%	
3	〃	(13.1)	-	(4.4)	燈褐色	良好	石英、角閃石、雲母	25%	
4	〃	(13.1)	-	(4.6)	燈褐色	良好	石英、角閃石、白色粒、雲母	25%	
5	〃	(13.2)	-	(4.4)	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示 30%	
6	〃	(12.7)	-	4.4	〃	〃	石英、角閃石、金雲母、白色粒	40%	
7	円筒埴輪	(26.6)	-	《23.3》	明赤褐色	良好	石英、角閃石、チャート、砂粒	図示 25%	外面縦ハケ、内面上部斜めハケ、 下部指ナデ（ハケ目） 20 本 /2cm
8	〃	(27.8)	-	《19.6》	明赤褐色	〃	石英、角閃石、砂粒、酸化鉄粒	〃	外面縦ハケ、内面上部斜めハケ、 下部指ナデ（ハケ目） 20 本 /2cm
9	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、片岩、角閃石、チャート	-	外面縦ハケ・上部横ナデ、内面斜めハケ・ 上部横ナデ（ハケ目） 8 本 /2cm
10	〃	-	-	-	灰燈褐色	〃	石英、チャート、角閃石	-	外面ナデ、内面横ハケ（ハケ目） 9 本 /2cm
11	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、片岩	-	外面縦ハケ・上部横ナデ、内面斜めハケ、 ナデ消し（ハケ目） 9 本 /2cm
12	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、片岩	-	外面縦ハケ・上部横ナデ、内面斜めハケ・上部横ナデ、 斜めハケ（ハケ目）10 本 /2cm
13	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、赤色粒	-	外面縦ハケ・内面ナデ（ハケ目） 7 本 /2cm
14	〃	-	-	-	灰赤褐色	〃	石英、長石、片岩、角閃石、白色針状物	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）
15	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ
16	〃	-	-	-	燈褐色	普通	石英、長石、片岩	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ
17	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、角閃石、酸化鉄粒	-	外面縦ハケ・上部横ナデ、内面斜めハケ・上部横ナデ
18	〃	-	-	-	燈色	やや悪	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	-	外面縦ハケ、内面横ナデ （刷毛目）10 本 /2cm
19	〃	-	-	-	暗赤褐色	普通	石英、長石、片岩、微砂粒	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（刷毛目）10 本 /2cm
20	〃	-	-	-	赤褐色	良好	石英、長石、片岩	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）10 本 /2cm
21	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、片岩、角閃石	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）8 本 /2cm
22	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、片岩、細礫	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）8 本 /2cm
23	〃	-	-	-	燈褐色	普通	石英、長石、片岩、細礫	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）7 本 /2cm
24	〃	-	-	-	明赤褐色	普通	石英、長石、片岩	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）8 本 /2cm
25	〃	-	-	-	赤褐色	良好	石英、長石、片岩、角閃石	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）10 本 /2cm
26	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、片岩	-	外面縦ハケ、内面指ナデ（ハケ目）10 本 /2cm
27	〃	-	-	-	赤褐色	やや悪	石英、長石、片岩、黒色粒	-	外面縦ハケ、内面縦ハケ（ハケ目）10 本 /2cm
28	〃	-	-	-	赤褐色	〃	石英、長石、赤色粒	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）8 本 /2cm
29	〃	-	-	-	明赤褐色	普通	石英、長石、片岩	-	外面縦ハケ、内面斜めハケ（ハケ目）9 本 /2cm
30	〃	-	-	-	灰赤褐色	普通	石英、長石、片岩	-	外面縦ハケ・指ナデ、内面指ナデ
31	〃	-	(13.2)	《8.1》	明赤褐色	普通	石英、角閃石、白色粒、赤色粒	-	外面縦ハケ・内面指ナデ（ハケ目）20 本 /2cm
32	形象埴輪	-	-	-	灰燈色	やや悪	白色針状物質、石英、細砂粒	-	外面縦ハケ・内面指ナデ（ハケ目）10 本 /2cm
	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	石材	備　　考		
33	尖頭器	4.3	1.6	0.5	3.4	黒曜石	側縁部調整剥離（全周）		

Ⅳ　まとめ

1.四十塚古墳群出土の土器・埴輪について

本報告の古墳からは少量ながら土師器・埴輪が検出されている。土師器はいずれも坏類であり、口縁部と体部の境に稜を有する『鬼高式』と呼称されるものである。

第６図No.１は、No.２～No.６と異なる形態を有する。直立する口縁部、深めの体部等から６世紀前半段階の特徴を有するが、厚手で粗雑なつくりである。

一方、第６図No.２～No.６については、口径が、11.8cm ～ 13.2cm の範囲にあり、胎土、形態的特徴等も近似することから、時間的に近い一群と考えられる。口縁部の外反傾向、体部の扁平化等の要素が特徴的であり、周辺地域において該当する竪穴住居跡では、砂田前遺跡 29 号住居跡、30 号住居跡（佐藤 1998）、宮西遺跡Ⅴ期の住居跡群（木戸 2005）等があげられる。年代観では、６世紀中葉が考えられる。伴う埴輪については、明確な根拠を有さないが、後述した土器の年代観に近いものと考えたい。

2.四十塚古墳群展開の画期について

本書では、四十塚古墳群のうち、平成 12 年度鉄塔建設に伴う発掘調査成果を掲載した。本古墳跡は、現状では６世紀中頃に近い時期の古墳跡であると考えており、発掘調査が十分ではない本古墳群の内容を考える上で極めて重要な調査成果であった。本項では、四十塚古墳群全体の展開について大きな４つの画期をあげ、その性格を考察する前提としたい。

第１の画期）　四十塚古墳群のうち古墳時代最古の調査は、四十坂遺跡の方形周溝墓群である。調査は、平成２年度に実施され周溝墓６基が検出された（鳥羽他 2002）。平面形態には、方形・円形の２種があり、時間的には方形→円形へと推移するものと考えられる。１号、３号周溝墓から土器が検出されている。１号周溝墓は、有段口縁の壺、甕、浅椀形土器が検出されており、これらの形態的特徴から五領期でも後半段階に推定される。

一方、３号周溝墓は、底部が穿孔された複合口縁壺、単純口縁の壺、小型の壺、甕、広口壺が出土した。底部穿孔で折返し口縁を有する壺は、比較的古い様相を呈しているが、刷毛目の消失化傾向等を考慮した場合、五領期終末から和泉期初頭にかけての所産であろう。以上２基の調査状況からして、現段階では五領期後半から和泉期初頭にかけて四十塚古墳群最古の遺構群が成立したといえる。

四十塚古墳群周辺地域でも近似した傾向を見ることができる。例えば、小河川（針ヶ谷堀）を隔て本庄台地側に隣接する原ヶ谷戸遺跡（村田他 1993）では、やはり五領期から和泉期にかけての周溝墓群が形成されているし、本調査地点から東に約１ｋｍの距離を置く中宿遺跡でも和泉期初頭の墳墓と想定される中宿遺跡１号墓が存在する（鳥羽 1995）。これらの墳墓群は、主に櫛挽台地直下の低地帯または、小河川の流域の沖積地を生産基盤とする集団により築造されたものであり、それぞれの単位は比較的小規模なものと考えられる。

深谷市北西部の台地及び丘陵地帯には、当該期の墳墓群が豊富に検出されており、比較的小規模な単位集団の存在が想定できる。先述の遺構群の他、安光寺古墳群（増田 1981）、千光寺古墳群、（増田 1975）畧山古墳群（岡部町教委 2006）などがあげられる。

第２の画期）　このような状況は、四十塚古墳群の成立により一変するものと考えられる。四十塚古墳は、昭和７年に農地開墾に伴い削平された古墳であるが、地元郷土史家柿沢利雄氏の詳細な記録により、発見時の状況が克明に復元できる（岡部町教委 2005）。

出土品の内容は、横矧板鋲留短甲、五鈴付鏡板付轡、鉄斧、鉄鏃等である。これらの副葬品群は、概ね５世紀末頃の組み合わせとされ、その豊富さは、当地域周辺の古墳の内容に比較しても群を抜いている。当古墳の築造は、四十塚古墳群の展開を考える上で重要な画期となるものであろう。

６世紀以降、古墳の築造は、圧倒的に増加する傾向がある。四十塚古墳群の状況は、明確ではないが、隣接する原ヶ谷戸古墳群（岡部町教委 2005）、白山古墳群（岡部町教委 2006）等で帆立貝式古墳を中心とした墳墓群が調査されている。

第３の画期）　６世紀後半段階では、本古墳群中最大規模の古墳である寅稲荷塚古墳が築造される。周辺の発掘調査及び確認調査成果によれば、本古

墳は全長51ｍの前方後円墳であることが確認されている（鳥羽他2001・岡部町教委2006）。石室の使用石材は角閃石安山岩であること等から６世紀後半段階の古墳と考えられる。本古墳の成立は規模、形状からして四十塚古墳群周辺のみならず、広い範囲に影響を及ぼすことのできる首長層の成長を示すものである。

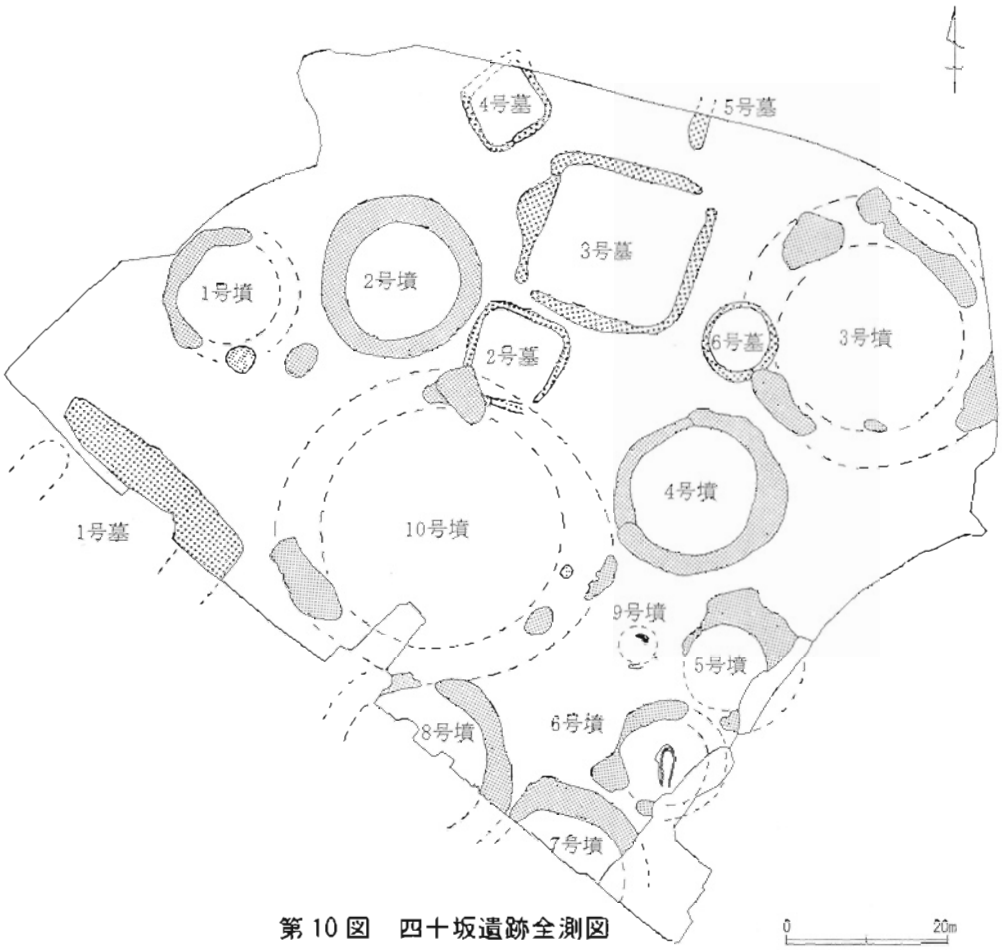
第４の画期） お手長山古墳は、埼玉県立本庄高校の測量調査（本庄高校1975）、岡部町教育委員会（当時）による発掘・確認調査などで全長49.5ｍの帆立貝式古墳であることが判明した（岡部町教委2006・鳥羽他2007）。周溝の調査から埴輪が全く検出されないこと、寅稲荷塚古墳と同様、石室の使用石材を角閃石安山岩とすることから寅稲荷塚古墳に後続する首長墓と把握できる。お手長山古墳周辺と四十塚古墳群とは、明確な古墳空白地帯を挟むことから、その成立基盤も異なるものと想定される。四十塚古墳群そのものの構成原理が崩れたことにより首長墓の位置が移動したことも考えられるが、四十塚古墳群中枢部から首長墓が移動するという大きな画期と把握することが可能である。

また、この時期以降、有力な古墳の立地が、お手長山古墳よりさらに東へ移動することが明確である（註１）ので、お手長山古墳築造以降、在地での勢力や古墳築造原理の変化を看取することが可能である。ただし、櫛挽台地北西部というエリアで見た場合、一貫して有力墳墓の築造がなされているとも言え、後の古代榛澤郡程度の領域で見た場合、台地直下の低地帯を含め、古墳時代首長層の伝統的勢力基盤とみることができる。当地域に７世紀後半以降、榛澤評家が成立することは、これら古墳時代の動向と大きく関わるものと考えられる。

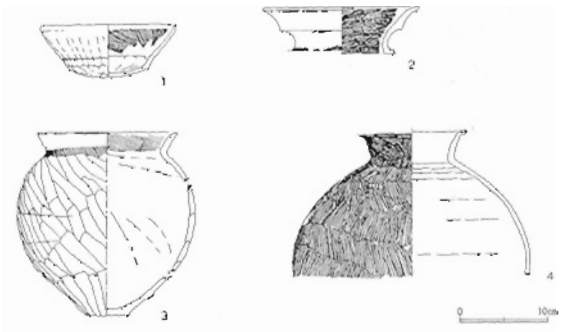
（註１）お手長山古墳以降では、内出八幡塚、愛宕山古墳が首長墓の候補と考えられる（岡部町教委2005）。

（引用・参考文献）

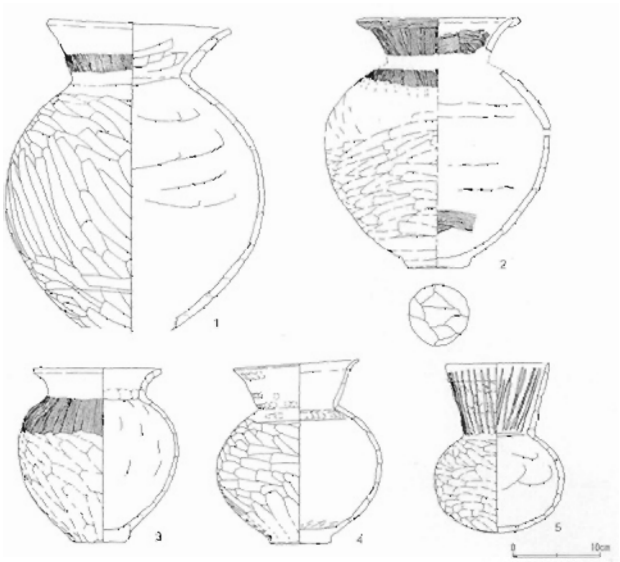
岡部町教育委員会2005「四十塚古墳の研究」
岡部町教育委員会2006「岡部町史－原始・古代編」
埼玉県立本庄高校考古学部1975「いぶき８・９合併号」
佐藤康二　1998「砂田前遺跡」（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団第198集
木戸春夫　2005「宮西遺跡Ⅱ」（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団第310集
鳥羽政之他　1995「中宿遺跡－推定榛沢郡正倉跡の調査」岡部町埋蔵文化財調査報告書第１集
〃　2001「町内遺跡Ⅱ－四十塚古墳群（第３次調査）」岡部町埋蔵文化財調査報告書第６集
〃　2002「四十坂遺跡」岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第11集
〃　2007「熊野遺跡－立堀地区/お手長山古墳」深谷市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第83集
村田章人他　1993「原ヶ谷戸・滝下」（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団第127集
増田逸朗　1975「千光寺」埼玉県遺跡調査会報告書第27集
〃　他　1981「清水谷・安光寺・北坂」（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第11集



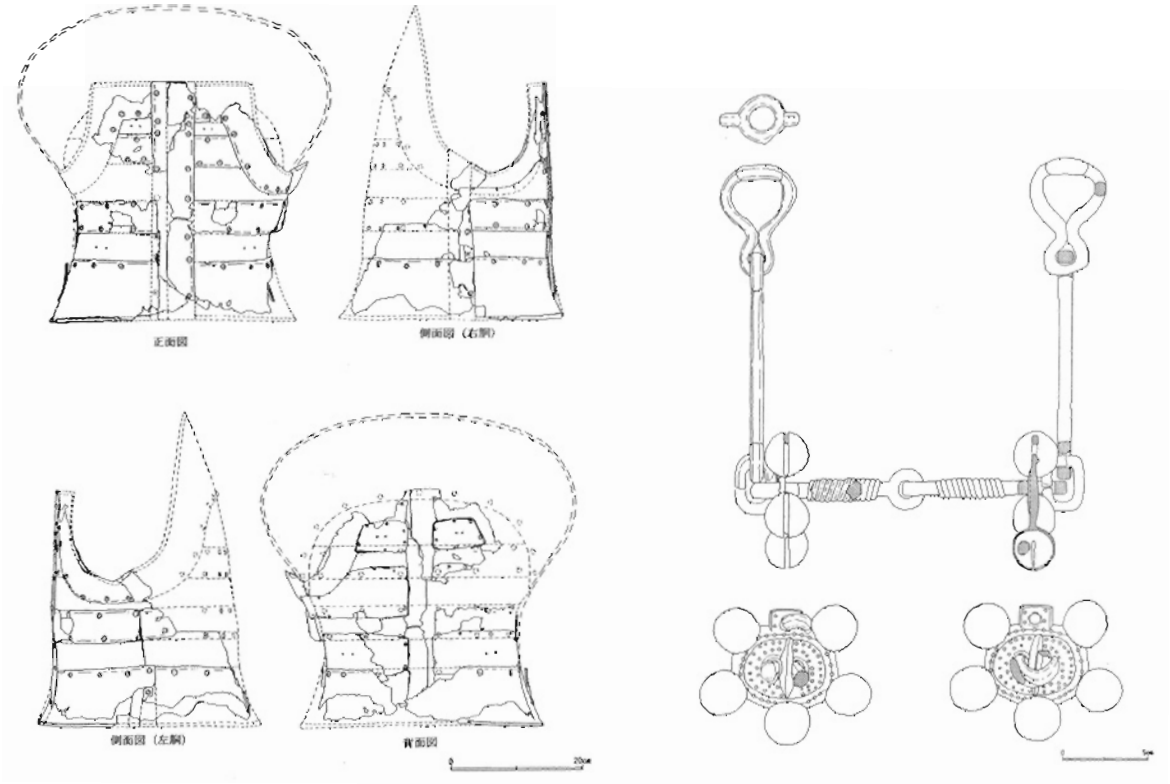
第 10 図　四十坂遺跡全測図



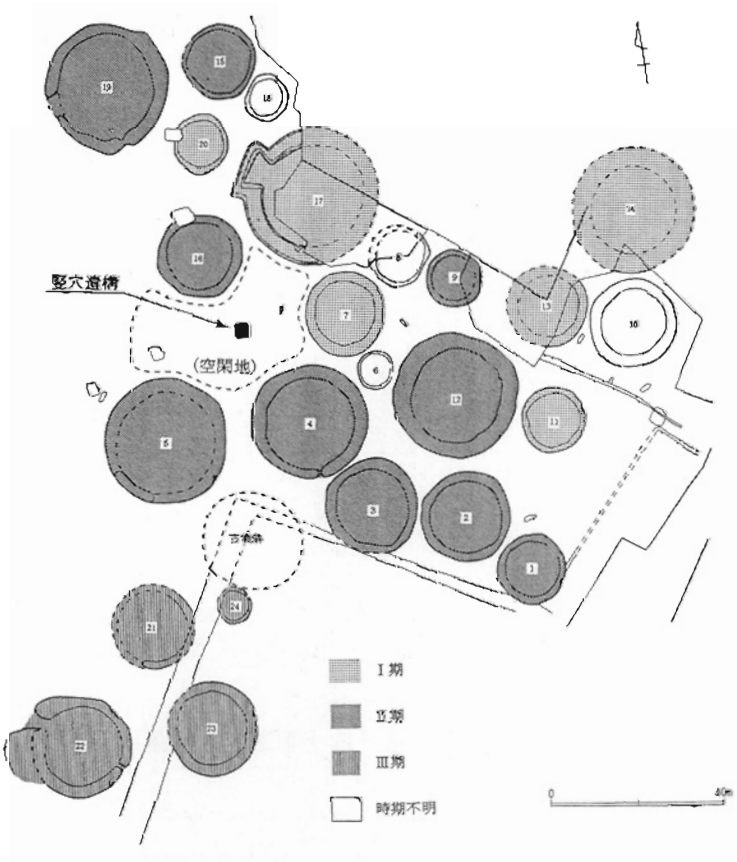
第 11 図　四十坂遺跡 1 号墓出土土器



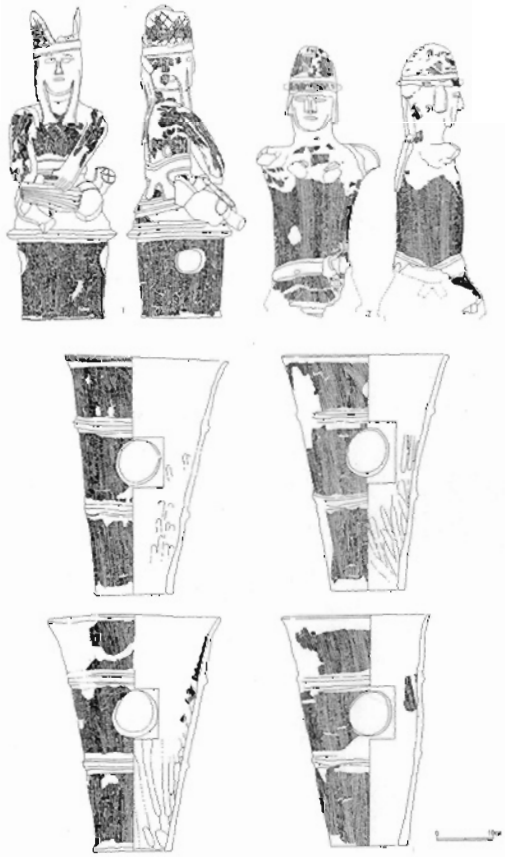
第 12 図　四十坂遺跡 3 号墓出土土器



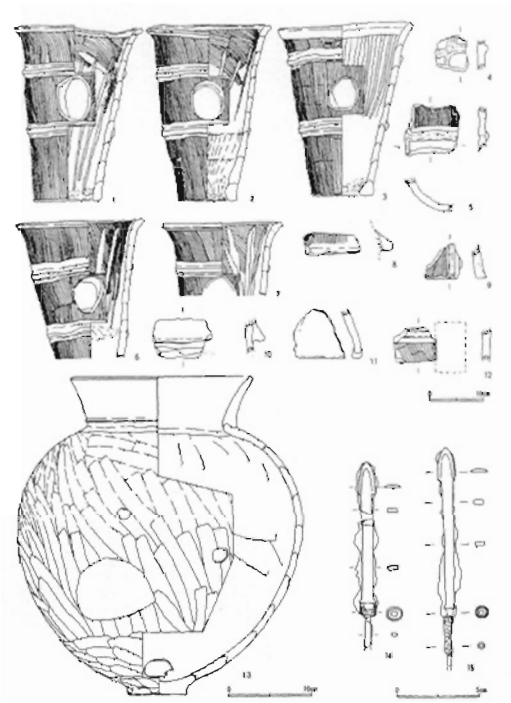
第 13 図　四十塚古墳出土遺物



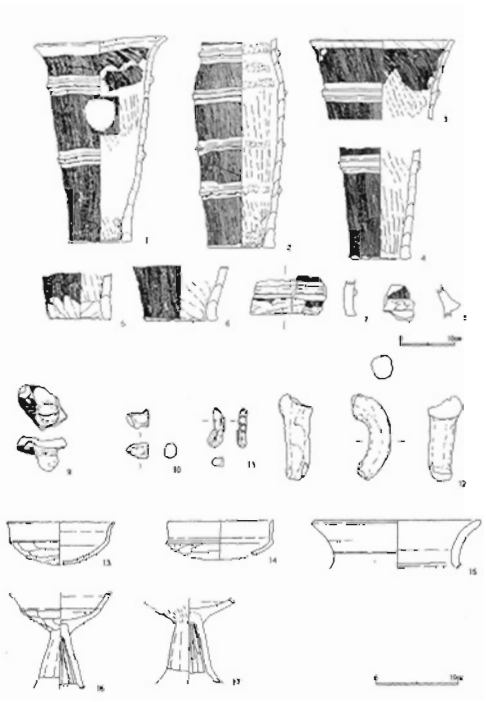
第 14 図　白山古墳群全測図



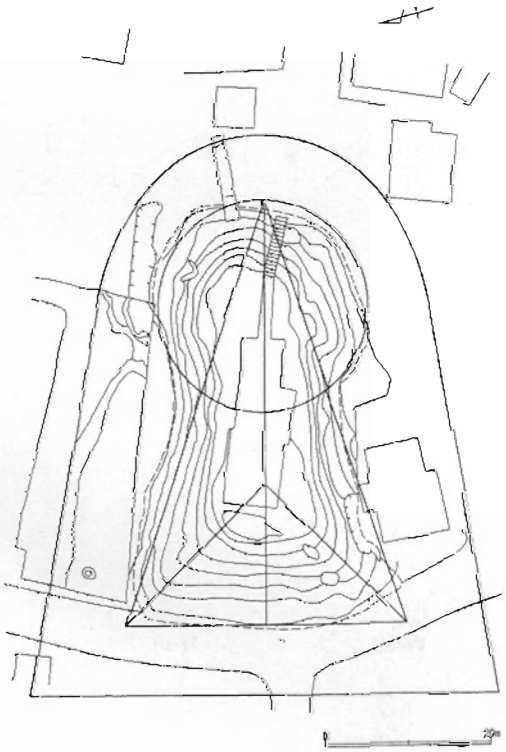
第 15 図　白山 17 号墳出土遺物



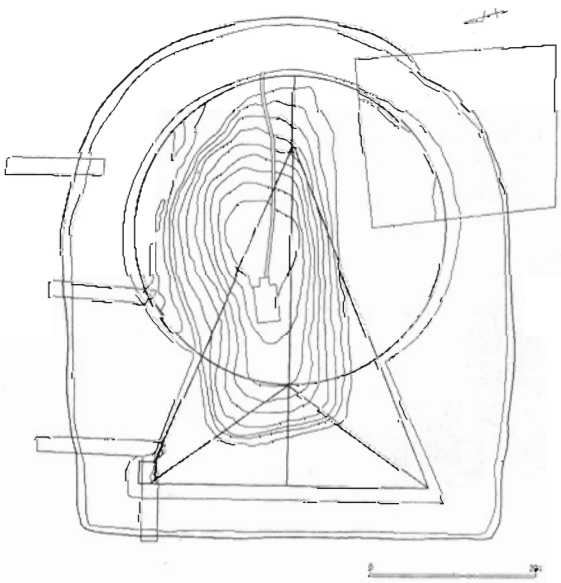
第 16 図　四十坂遺跡２号墳出土遺物



第 17 図　四十坂遺跡４号墳出土遺物



第 18 図　寅稲荷塚古墳全測図



第 19 図　お手長山古墳全測図

報告書抄録

ふりがな	しじゅうづかこふんぐん
書　名	四十塚古墳群
副書名	平成12年度の調査
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	第95集
編著者名	鳥羽政之
編集機関	深谷市教育委員会
所在地	〒366-0823　深谷市本住町17番地3　℡048(572)9581
発行日	平成20年３月20日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
四十塚古墳群	埼玉県深谷市 岡1607番地1	11218	100	36°13′04″	139°13′56″	平成12年10月２日から 平成12年10月20日まで	42㎡	鉄塔 建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古墳群	旧石器時代 古墳時代	古墳跡　1基	尖頭器 土師器 埴輪	

図版１

発掘調査前の状況

遺構確認の状況

１号墳完掘状況（北方より）

周溝立ち上がりの状況

１号墳完掘状況（東方より）

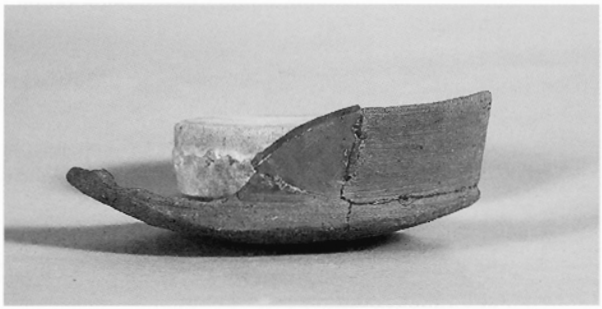
土器出土状況

土層堆積状況

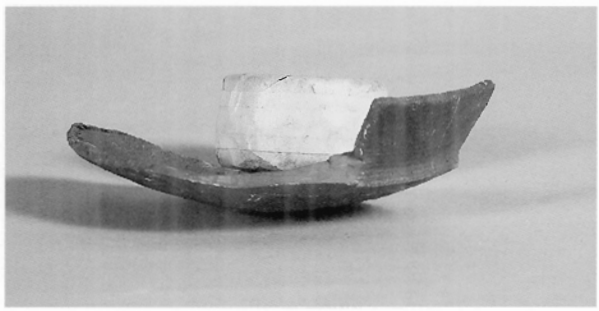
図版２

１号墳No.１

１号墳No.３

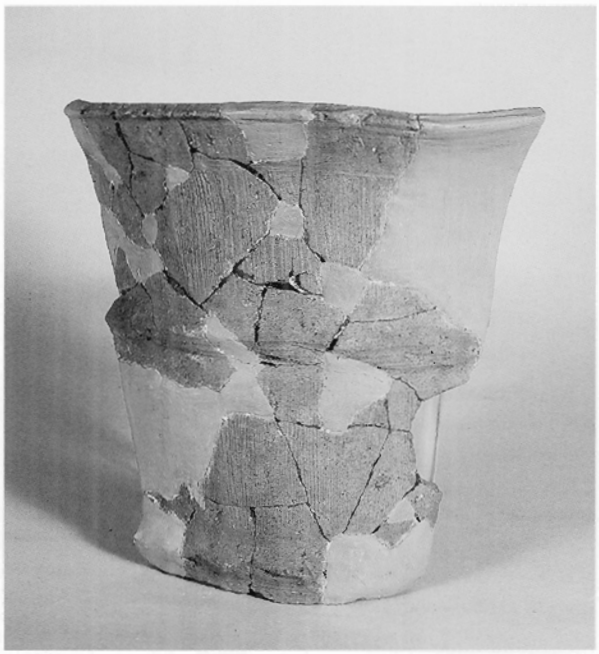


１号墳No.４



１号墳No.５

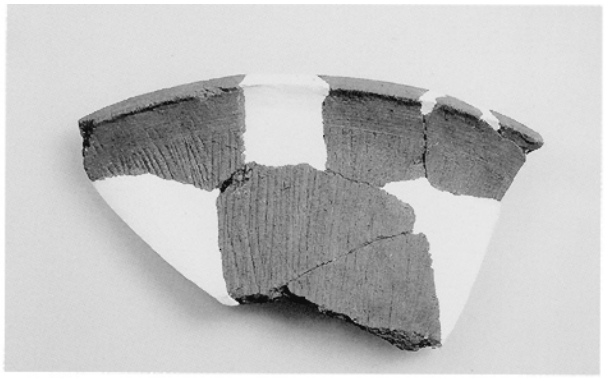
１号墳No.６



１号墳No.７

１号墳No.８

１号墳No.９～１４



１号墳No. 15

１号墳No. 16 ～ 21

１号墳No. 22 ～ 27

１号墳No. 28 ～ 32

周溝内出土尖頭器

四十塚古墳群－第４次調査－

2008年３月20日

編集発行　深谷市教育委員会
深谷市本住町17番地３